

第四章 朝倉氏羣像の素描

第一節 黒丸城主

廣 景

朝倉氏が越前國に永住することゝなつたのは、初代一乘城主たりし越前國主敏景が元祖ではない。それより以前既に廣景、高景、氏景、貞景、教景、家景の六代が、越前國坂南郡(後の坂井郡)の黒丸城主であつたのだ。但茲に氏景、貞景といふは、後の越前國主の氏景、貞景とは同名異人である。

朝倉廣景は足利武衛高經の老臣である。孫右衛門尉、美作守と稱す。朝倉孫太郎宗直の嫡男で、建長七年を以て但馬國朝來郡に生る。翌年三月、朝廷檢非違使章國を越前に流す。弘長二年十一月、淨土真宗開祖親鸞示寂し、文永九年十二月、覺信尼大谷本願寺を創建した。十一年十月、蒙古の兵三萬餘對馬、壹岐、筑前に寇し、次で弘安四年五月、元兵大舉筑前に寇したけれど、閏七月、大風起りて元艦を覆没してしまつた。文保二年三月、後醍醐天皇即位、元亨元年十二月、後宇多法皇政を還さる。四年九月、天皇幕府追討を謀り給ふ。元弘元年九月、北朝にては新たに光嚴帝踐祚し、茲に南北兩朝分立す。此の月、楠木正成等義兵を起したが、その據る所の笠置は陥つた。二年三月、天皇の車駕を隱岐に遷し、尊良、尊澄、恒良親王を流す。四月二十八日、北朝始めて新年號正慶を自稱した。同年十一月、正成千劍破城を築く、護良親王の兵を吉野に擧げられたのも、赤松則村が義兵を播磨に集めたのも、皆同じ月である。三年(以下)正慶二年)二月、土居、得能二氏伊豫に義兵を起す。同月赤坂城、閏二年吉野共に陥落、天皇隱岐

を遁れて名和長年に據らる。三月菊地武時、北條英時を討つ。四月足利高氏歸順し、丹波國篠村通過の節、廣景始めて足利高經に附屬した。爾來朝倉氏は廣景より義景に至る十一代の間、廢世足利氏の恩顧を受けたのである。同年五月、高氏、則村、源忠顯等六波羅を攻めて京都を復し、新田義貞は北條高時を鎌倉に誅した。六月、北條英時誅に伏して九州平ぎ、十月、源顯家陸奥、出羽を鎮定す。建武二年七月、北條時行鎌倉を攻めて之に據り、足利直義は遂に護良親王を弑し奉つた。十月高氏、時行を討ち、鎌倉に據りて反す。是れ足利氏に劃期的時代を形成した始めである。後世の史家は、朝倉氏が南朝の叛將足利氏に臣事したことを論難攻撃する者もあるけれど、當時は南朝といひ、北朝といふも、天子の御血統にお變りはない。たゞ權勢家が、反抗したり、歸順したり、反覆常なしといふ時代だから、南北正閏論の如きは、一般國民は知らなかつた。廣景が足利氏に仕へたのも、その實は源氏の名流足利氏家臣の列に入るを光榮として、終始一貫足利氏の爲に忠勤を抽んでたまでである。其の証據には、廣景が足利氏の家臣になつたのは、高氏が南朝に歸順した當時であつたのに徴しても首肯するのである。

建武二年十月、高氏の反するや、義貞は尊良親王を奉じて之を討つたが、十二月、官軍は箱根竹下に戰ふて潰走した。三年正月、高氏軍を率ゐて入京し、車駕延曆寺に幸す。次で官軍京都を復し、高氏九州に走る。二月南朝延元と改元(建武三年)三月菊地武敏、高氏を多々良濱に戰うて敗る。四月、高氏、直義等大舉東上す。五月義貞、正成等高氏を兵庫に迎へ撃ちしも利あらず、正成は湊川に戰死した。即ち高氏は京都を陥れたので、車駕再び延曆寺に幸す。八月、北朝光明帝即位、十月義貞、皇太子及び尊良親王を奉じて越前に來り、金ヶ崎城に據る。二年(建武四年)正月、北畠顯家、義良親王を奉じて陸奥の靈山に據る。三月廣景但馬國より始めて越前に來る。同月金ヶ崎城陥り、尊良親王、新田義顯戰死す。十二月、顯家鎌倉を略取した。三年正月、顯家、義良親王を奉じて西上す。三月顯家、高氏と阿部野に戰ひて敗れ、五月石津に轉戦して死す。閏七月二日、義貞は平泉寺衆徒の寢返りに據り、越前國吉田郡

燈明寺殿に戦死した。歴史上有名なる藤島の戦とは是である。此の時廣景は足利高經に従軍して居つたが、戦功に依り坂南郡三宅黒丸城主に封ぜられたので、黒丸右衛門尉廣景入道宗性と號した。當時足羽郡は一條卿の領地で、廣景はその代官職に宛行はれた譯であるが、妙淨と稱した廣景の夫人は、實に此の一條卿の孫女であつた。此の年八月、高氏征夷大將軍に任ず。四年(曆應二年)八月、後醍醐天皇位を後村上天皇に譲り、十一月吉野行宮に即位せらる。興國三年(康永元年)四月、脇屋義助伊豫に至り、四國を平定せんとしたが、翌月卒去した。正平二年(貞和三年)廣景、北庄の神明社を修造す。翌三年(四年)正月、楠木正行、高師直、高師泰と四條殿に戦ひて死し、北軍は吉野を焚いた。その後廣景は興徳寺、興善寺、了悟庵を建立したが、七年(文和元年)二月二十九日を以て卒す。年九十八、法名を廣鑑院殿空海宗性大居士と曰ふ。廣景遺訓七十七箇條は、敏景十七箇條と共に、朝倉氏の二大家憲の一として著名である。

高 景

朝倉高景、幼名は彦三郎、初名は正景、孫右衛門、彈正左衛門尉、遠江守、下野守と稱す。朝倉廣景の嫡男で、正和三年を以て近江に生る。正平三年(貞和四年)十月、北朝光明帝位を崇光帝に譲らる。七年(文和元年)二月、父廣景卒去の後、黒丸城主二世を襲封す。此の月高氏弟直義を殺す。閏二月には宗良親王兵を信濃に起し、八月には山名師氏、同時氏、十一月には足利直冬等共に歸順す。同月北朝後光嚴帝踐祚、八年(二年)六月、南軍、足利義詮を破りて京都を收めたが、翌月義詮はまた入京した。九年(三年)十二月直冬、時氏等と高氏を討つたので、高氏は後光嚴院を奉じて近江に走つた。十年(四年)二月十五日、南北兩軍、京都の東寺南大門に戦ひし節、正景勇戰

奮闘、京都三萬の兵を撃破した戦功に對し、將軍足利高氏大に之を激賞し、即時に正景の母衣ほろに高氏の高字を直書し、遠江守高景と稱せしめた。翌三月、高氏、義詮、京都を復す。十一年正月、足利高經、高氏に降る。十二年(延文二年)六月、細川清氏、越前國守護職を望みて成らず、阿波に逃走した。十二月二日、高景に越前國足羽郡北庄領所職を宛行ふ旨の奉書を賜ふ。十三年(三年)十月、足利基氏、新田義興を矢口に誘殺す、十二月、足利義詮に將軍宣下、十五年(五年)五月、畠山國清等赤坂城を圍む。楠木正儀等自ら城を燒きて金剛山に逃る。七月、仁木義長歸順す。十六年(康安元年)十月、細川清氏も亦歸順した。十二月、南軍大舉して京都を襲ふ。義詮、後光嚴帝を奉じて近江に走つたが、尋で歸京した。二十年(貞治四年)五月、河野道直歸順す。二十一年(五年)十一月六日、越前國の七ヶ所地頭職を任命せらる。二十三年(應安元年)三月、長慶天皇即位、十二月足利義滿に將軍宣下。二十四年(應安二年)正月、正儀、足利義滿に降る。楠木氏の一族中、敵に降参するとは以ての外の不忠不義なる行爲であるとして、古來史論が沸騰して居るが、或は再舉を謀るべく、一時の方便で降参したのかも知れない。四月、桃井直常が兵を越中に起した。此の直常は後世越前國丹生郡西田中に永住したる越前幸若音曲家の祖先である。而して贈正四位橋本左内は、實に幸若の後裔より出づ。建徳二年(四年)三月、北朝後光嚴帝、位を後醍醐帝に譲らる。八月、和田正武、正儀を攻む。而して高景は文中元年(五年)五月二日を以て卒す。年五十九、法名を高名院殿徳嚴宗祐大居士と曰ふ。

氏 景

朝倉氏景、幼名は孫次郎、孫右衛門尉、美作守と稱す。朝倉高景の嫡男で、延元四年(曆應二年)を以て生る。正平十年(文和四年)二月十五日、南北兩軍、京都の東寺南門に戦ひし節、父高景と共に勇戦し、貞宗の太刀を以て敵の體を切つたので、その太刀の心に體切と銘を刻んだ。當時將軍足利高氏は父子の健闘を激賞し、高氏の諱の内、高

の字は父に與へ、氏の字は子に與へたので、爾來美作守氏景と稱することゝなつた。文中元年(應安五年)五月、父高景卒去の後、黒丸城主第三世を襲封す。天授四年(永和四年)三月、將軍足利義滿室町第を造り、六年(康曆二年)鹿苑院を建つ、弘和二年(永徳二年)正月、楠木正儀歸順す。元中五年(嘉應二年)三月、山名氏清、楠木正勝を撃つた。九年(明徳三年)正月、畠山基國千劍破城を攻め、正勝等克^かずして吉野に走る。閏十月、義滿南北の和を議し、後龜山天皇京都に還り、父子の禮を以て神器を後小松天皇に讓られ、茲に南北統一す。應永八年、足羽郡安居の弘祥寺佛殿を再建し、熊野三社を一乘谷に勧請したが、十一年十二月二十八日を以て卒す。年六十六、法名を隆運院殿大功宗勳大居士と曰ふ。但、大功の二字は嘗て義滿の命を奉じて、攝津國中島に戦ひ、大功を建てたる勳績に依り、義滿の直書して賜はつた別號である。

貞 景

朝倉貞景幼名は又太郎、孫右衛門尉、下野守しもつけのかみと稱す。氏景の嫡男で、正平十三年(延文三年)を以て生る。應永九年十一月二十五日、足羽郡安居の弘祥寺を十刹の^一に列した。十一年十二月、父氏景卒去の後、黒丸城主第四世を襲封す。十九年八月、後小松天皇位を稱光天皇に讓らる。三十年三月、足利義量に將軍宣下せられしも、三十二年二月薨す。三十五年正月、前將軍義持薨じ、三月、義教家督を相續して將軍職を襲ふ。正長元年七月後花園天皇踐祚。永享八年閏五月十六日を以て卒す。年七十九、法名を貞功院殿大心宗忠大居士と曰ふ。

教 景

朝倉教景、幼名は小太郎、孫右衛門尉、美作守と稱す。朝倉下野守貞景の嫡男で、天授六年(康曆二年)を以て生る。永享八年閏五月、父貞景卒去の後、黒丸城主第五世を襲封す。九年正月十七日、將軍足利義教の命を奉じ、大和一色修理大夫義範及び世保某を誅した。十一年正月、鎌倉の公方足利持氏、京都を輕視するを憤り、小笠原信濃守政康、今川上総介範忠、武田太郎信重を追討使として鎌倉に下した。當時教景は斯波氏の被官であつたが、武勇絶倫の譽があつたので、教景にも鎌倉征伐の台命があつた、即ち此の三勇士と共に進軍し、二月十日、遂に持氏父子を討ち取つた。所が結城七郎氏朝が春王丸、安王丸といふ持氏の二子を日光山より迎へ、下野國結城に籠城したので、嘉吉元年四月四日、又義教の命に依り、教景が軍を進めて、氏朝、持朝の父子を討ち取り、剩へ春王、安王を捕へて上洛した、義教大に喜び、特に諱の教字を賜はつたので、爾來美作守教景と稱した。二年十一月、足利義勝に將軍宣下、翌三年七月、義勝薨じたるに依り、義教家督を相續して將軍職を襲ふ。寛正四年七月十九日を以て卒す。年八十四、法名を大圓院殿心月宗覺大居士と曰ふ。

家 景

朝倉家景、幼名は小太郎、孫次郎、爲景、孫右衛門尉、下野守と稱す。朝倉美作守教景の嫡男、應永九年を以て生る。黒丸城主第六世を襲封せしも、父教景に先だつこと十四年前に卒去せしを以て、その年月日詳かならず。文安三年八月六日、足羽郡北庄の神明社を再興したる外、事績が傳はつて居ない。寶徳二年十二月二十日を以て卒す。年四十九、法名を法身院殿岡山宗堅大居士と曰ふ。

第二節 北庄城主

頼 景

朝倉頼景は朝倉下野守貞景の次男で、黒丸城主第五世朝倉教景を兄とし、靈雲庵の開基朝侍者を弟とす。頼景は始めて北庄城主と爲つたので、北庄遠江守と號し、子孫皆此の城主を相續した。文安三年三月朔日を以て逝く。法名を萬松院殿從五位次將永春宗安大居士と曰ふ。永春寺に葬る。

信 景

朝倉信景は北庄遠江守朝倉頼景の嫡男で、左京亮と稱す。北庄城主第二世。

景 安

朝倉景安は朝倉信景の嫡男で、土佐守と稱す。北庄城主第三世。

景 光

朝倉景光は朝倉景安の嫡男で、左京亮と稱す。北庄城主第四世。

景 範

朝倉景範は朝倉景光の嫡男で、土佐守と稱す。北庄城主第五世。

景 行

朝倉景行は朝倉景範の嫡男で、土佐守と稱す。北庄城主第六世。天正元年八月十四日、近江國刀禰坂で戦死した。法名を秋峯院殿快雲宗俊庵主と曰ふ。永春寺に葬る。

第三節 犬山城主

經 景

朝倉經景は與三左衛門尉、下野守と稱す。朝倉家景の次男で、越前國主初代朝倉敏景を兄とし、與市郎、敦賀城主朝倉景冬、慈視院玉殿、大孝寺聖室、勝藏坊久嶽、宗階侍者定國を弟とす。大野郡犬山城主第一世。

景 職

朝倉景職は與三左衛門と稱す。朝倉經景の嫡男で、犬山城主第二世。

尹 景

朝倉尹景、幼名は孫八郎、與三左衛門と稱す。朝倉景職の嫡男で、犬山城主第三世。

景 鏡

朝倉景鏡は越前國主第五世朝倉義景の逆臣で、朝倉家を自滅せしめた獅子身中の蟲である。幼名は孫八郎、式部大輔と稱したが、織田信長に降りて土橋氏に改めた。朝倉尹景の嫡男で、犬山城主第四世である。

朝倉義景が織田信長と戦ひ、敗れて一乗谷城へ歸陣したのは、天正元年八月十六日であつた。義景も到底信長に勝利を得る見込がないので、大に悲觀して居つた所へ、朝倉景鏡、鳥居景親、高橋景倍が來訪した。そこで義景は、「豊原寺へ退去したい」と相談すると、胸に一物を抱いて居た景鏡は、さあらぬ體で、「同じ退去なさるならば、大野へ退去された方が宜しい。彼處は山中も深く、その上平泉寺が味方したならば、信長と雖、さうたやすくは攻めて來られまいと思ひます」と、如何にも同情的に勧誘したので、「然らば今後は諸事一切、景鏡の指揮に任せやう」と

言つて、愈々翌日大野へ退去することを決議した。一體義景は景鏡を信任し過ぎた。執權も第一、俸祿も第一といふ拔擢の優遇をしたので、景鏡は恩寵に増長し、却て義景は飼猫に手を噛まれたのである。是が抑も失敗の原因だ。何んとなれば、景鏡が義景を大野へ誘ひ出さんと計劃したのは、逃げ場所のない山間部の土地へ、義景を追ひつめて之を殺し、その頸を信長へ献上して返忠の恩賞に預からんとする目的であつたからである。然し神ならぬ義景は、同族の景鏡が、こんな大それた陰謀を抱いて居やうとは、夢にも知らなかつた結果は、嘗に義景の一族のみならず、遂に朝倉氏を全滅する大問題を惹き起した、返す／＼も痛嘆の至りだ。

扱て義景一行は八月十七日の夜、愈々大野の洞雲寺に到着したので、此の際は非平泉寺の應援を乞ふべく、翌曉早速使を馳せて懇請せしめると、衆徒は三社大権現の拜殿前に集合して協議を始めた。中には「平泉寺は多年越前國主朝倉氏の大恩を蒙つて來たのだから、勿論義景を應援すべきだ」といふ正論派もあつたが、「今若し義景を應援したならば、明日にも信長が平泉寺へ攻め寄せ、忽ち堂塔伽藍を破却するに相違ない。義景の如き再起の見込のない者を應援するよりも、宜しく信長に同心した方が利益だ」といふ忘恩利己主義論が勢力を得た。嘗て南北朝戦争の時も、平泉寺衆徒は南朝に左袒し、新田義貞の味方をして居つたのが、足利高經より平泉寺舊領の藤島七郷を恩賞として平泉寺へ寄進する故、北軍の味方になれと勧誘すると、掌を返す如く、南軍を捨て、北軍に附いた。義貞の戦死を早めたのは、實に平泉寺の返忠の爲め、作戦上違算を生じた結果だと言つてよい。「北陸七國志」に據ると、信長も亦平泉寺を釣るに、「味方に力を合せなば、藤島七郷を平泉寺へ寄附すべし」といふ巨利を以て誘ひ出して居る。斯様に平泉寺衆徒は、古來利慾の爲めに盲動し、少しも節操が無かつた。如何なる開祖の泰澄大師も、後世平泉寺が、斯る僧兵惡黨の巢窟と化さうとは、更に夢想もされなかつた事だと信じる。それは兎に角、義景の使者が未だ洞雲寺に歸著せざる間に、衆徒は先き廻りをして、義景陣所の洞雲寺附近に馳せ來り、ドツと民家に放火した。此の時景鏡は

得たり賢しと跳り出で、「平泉寺へ義景の行かぬ前より、拙者は義景に意恨があつた。故に拙者も衆徒を後援するかから、大に義景に双向ひ給へ」と、薪に油を注いだからたまらぬ。衆徒は益々火炎の如き勢を得た。一方十八日の未明より二十日の三日間、一乗谷の城塞にも放火して、満山一掃の廢墟に歸してしまつた。

時に近江國中河内口に居つた義景の家臣魚住備後守景固も、朝倉氏の大敵たる信長に寝返り、嫡男彦三郎を敦賀在陣の信長へ派遣して、「本月十七日、義景は人數僅に二十騎計で大野へ落ちましたが、景鏡も平泉寺衆徒も、義景へは同心しませぬから、越前國中には一人も公の敵は御座りませぬ。速かに南條郡の府中(武生町)へ御進發ありたし」と申出たので、十九日、信長は府中龍門寺を本陣に据ゑることゝした。その先陣は木下藤吉郎、柴田修理亮、明智光秀の三千餘騎であつたが、威風堂々、騎馬肅々、途中放火殺人の暴舉が無いので、頗る評判が宜い。次は總大將織田信長、旗本五千餘騎を隨へて打ち通つたが、吾も／＼と先を争つて駆け付けた諸大名の二千騎、三千騎も、絡繹として府中に到着した。

此の十九日、景鏡は義景の妹婿大野三河守と謀合せ、使者を義景へ遣はして、「便宜上山田の庄六坊賢松寺へ御移り下さい」と申立てた。義景は未だ景鏡の計略とは氣付かず、同日酉の刻、うか／＼と六坊へやつて來た。斯くて義景一行は十二人の同勢で、六坊に同居することゝなつたが、皆々行末を案じて寝もやらず、遂に夜が明け、外山に鹿の鳴く聲を聞けば、哀音翹々、眞に斷腸銷魂の感に打たれる、鳥居景親

理りやいかでか鹿も鳴かざらん今宵計のいのちと思へば

と、早速一首を口吟むと、高橋景倍も之に和して

秋風に逢ふこのみぞかなしけれ我身空しく成ぬと思へば

と詠じた。義景之を聞き、「何れも古歌と覺ゆるが、時の取合せ神妙である」と評した。一方景鏡は二十日未明よ

り起き出で、家の子郎黨を非常招集して、信長應援の協議を始めたが、特に老臣平野中道寺を顧みて、「かねて信長公より、義景を討ち果した者には、望に任かせて過分の恩賞を取らせるといふ起請文が来て居る。今、六坊在任の義景の形勢を見るに、鳥の翼を抜き、車の輪を破りたると同然である。就ては義景に腹切らせるか、然らずんば押懸て討果し、信長公に降参の土産とせんと思ふが如何に？」

と放言した。所が此の平野は中々の忠臣であり、硬骨漢であるから、御無理御尤などは言つて居らぬ。大に景鏡の無謀を諫止した。「信長記」巻第六に、平野の諫言を、

「御言葉とも覺えぬ物かな、孝經に曰、君、君たらずと雖も、臣は以て臣たらずんばあるべからず。又た語に曰く、君恩より大なるもなく、父恩より深きものなしとあり、夫れ人たるの道は義を以て利とす、利を以て利とせずとかや、若し不義に陥つて義景を討ち給はゞ、かれは先、これは後といふ計りにて、幾程もなう亡び給ふべし、史記に曰く、忠臣は二君に仕へず、貞女は二夫を更めず、内には君の過を匡し、外には君の美を揚げ、邪を以て正しきを損せず、私を以て君を害せずといふ事あり、同じくは義景と共に、死を善道に守られ候へ」

と記述して居る。此の諫言は古今の名訓だ。古來忠孝一體と説く者あれど、忠は公的で重く、孝は私的で軽い。君命は重く、臣節は猶更重いとするのが、大和魂一名日本精神の解釋である。山崎闇齋も、その子弟を教育するに當り、君、君たらずと雖、臣は以て臣たらずんばあるべからずと力説した。此の闇齋の學派に屬する楠本景岳や梅田雲濱も、此の語を金科玉條として、大義の爲めに生命を擲つて、君國の犠牲となられたのである。良薬は口ににがく、忠言は耳に逆らう。是に於て景鏡は忽ち色を變じ、

「やあ中道寺よつく承はれ、今、世間の體を覘ふに、義景配下の部將は、皆江北刀禰山の奮戦に討死、朝倉三郎景健、同前孫三郎景胤及び魚住備後守景固、溝口大炊助、平泉寺衆徒達も、悉く變心して敵に與みした以上、我一人義

を守りたりとて、何の用にか立つべき、況や日來義景我等に對し、情なき事ども多きに於てをやである。斯くなる上は忠義も、恩顧も是までだ。問答無用、やあ〜者共、討てよ、続け」

と、腹心股肱の徒二百餘騎を叱咤し、犬山城より程近き六坊へ押寄せ、鐵砲を打懸けた。義景は餘りの事にあきれ果したが、「さては裏切か？、憎き景鏡の振舞哉」と答へしも、敵の十六分の一にも足らぬ少勢にては如何とも致し難く、遂に天正元年八月二十日、義景は四十一歳を一期として自害した。

景鏡は斯る悪黨だから、平泉寺の滅亡にも關係して居る。平泉寺は越前國大野郡に在り、靈龜三年六月、泰澄大師の開基に係る。大師は同年より四十二年、即ち天平寶字二年越知山に歸住の年まで、白山に滞在せられたので、いはゞ平泉寺は冬籠の道場であつたのである。壽永二年五月、旭將軍源義仲が倶利伽羅合戦の時大捷利を得たのは、偏に白山社の神助と平泉寺衆徒の應援の力だといつて、藤島七郷を平泉寺へ寄進したので、在來の神領を合せて九萬石九萬貫となり、六千坊の豪華なる金殿玉樓山中に櫛比し、人をして海市蜃樓には非らざるかと疑はしめ、天下無双の緇衣侯を以て目せらるゝ最盛期を現出した。後、此の藤島郷を幕府の爲に奪はれたのを、平泉寺は非常に遺憾に思つて居たが、南北朝時代には白山寺衆徒と共に、南軍に味方し、新田義貞を援けて居た時、北軍の大將足利高經より、藤島七郷を寄進するから味方になれと言はるゝや、忽ち南軍より轉じて北軍に左袒した。又信長、義景合戦の際も、信長より藤島七郷を寄進するからと言はれて、好餌に舌鼓を打ち、言下に信長に寝返つてしまつた。而してさしも繁榮なりし平泉寺も、樵花一朝の榮にて、遂に滅亡した。その理由は、天正元年南谷の飛鳥井寶光院が、弟子兄弟たる波多野玉泉坊との勢力争ひから不和を生じたるに基因す。同年八月、織田信長は義景を進撃して越前國府中に陣取つた。義景時に利あらず、逃れて大野の洞雲寺に入り、平泉寺衆徒の合力を依頼すべく、その内意を探つたが、前述の如く、衆徒の協議は變心反逆に一決し、忘恩の舉を招來するに至つた。斯くて玉泉坊は私に府中の信長の本陣に赴き

一山總務の朱印を乞ふたのが、抑も平泉寺滅亡の一大騷動の導火線となつたのである。翌二年正月二十三日、寶光院を始め平泉寺の衆僧等、大に玉泉坊の專斷を憤り、加賀、越前の一向一揆を語らひて玉泉坊に押寄せ、坊舎を焼き、師弟妻子を誅戮した。然るに後、寶光院も亦專横を始めたので、衆徒は再び怒り出し、之を攻撃しやうとしたので、寶光院は俄に狼狽し、朝倉氏の逆臣朝倉景鏡の妻子、及び黨徒三十餘人を迎へて參謀とした。四月上旬下旬、寶光院等七千餘人、村岡山に攻め寄せ、三日三夜激戦、死傷算なし、同月十三日、豊原寺、本覺寺の衆徒、及び七山家の一揆等七八百人、平泉寺の背後より攻め寄せ、翌十四日、明王院先づ放火せられ、堂塔伽藍悉く烏有に歸し、平泉寺開闢以來一千五十年間の興隆も、憐れ一片の煙と化して終つた。此の平泉寺滅亡の際も、景鏡が仲間に入つて、煽動して居るが、よく、惡黨に出來た男であつた。「朝倉始末記」に據ると、當時景鏡は一揆に攻められて慘々に敗北し、皆討たれて主従唯三騎となつたが、兩人の者も早や戦死したので、今は是れ迄なりと覺悟し、凡下の奴原の手に懸るも口惜しとて、自ら太刀を胸上に突立て、馬上より地上へ落下した所を、袋田の土民が折合ひ、鎌にて頸を搔切り、直に馳せて豊原寺在陣の大將下間筑後の見參に入れた。大將は頸實檢の後、景鏡の嫡子十餘歳、次男六歳の兄弟を尋ね出させ、父子三人を同じ獄門の木に梟した。當時「不義の富貴は浮雲の如し」と評せらる、その時分、大野山賤の間に、

日の本に隠れなき名を改めて果は大野の土橋とぞなる

といふ狂歌が流行した。即ち景鏡の誅戮せられたのは、平泉寺灰燼の翌四月十五日の由、「日下部朝倉家系圖略」に載つてゐる。

所が茲に異説がある。「春日山日記」に朝倉兵部少輔義鏡とあるのは、朝倉式部大輔景鏡の誤記だが、同書に、景鏡が信長の賄賂に耽り、一族老臣の好を忘れ、義景近仕の者に謀りて之を害し、その頸を信長に献上して降参す。信長、朝倉氏の殘黨を平定の後、景鏡は義景の同姓同族で、その上恩祿等倫に越え、執權も亦隨一なり。然るに重恩の身として不義の欲に耽り、主人義景を殺して降参するなど、は以ての外で、人倫の法に非ず、誠に人面鬼心の男である。士の見懲の爲にもとて、遂に斬罪に行ひ、頸を獄門に梟したが、見る者爪弾をしないものは無かつたといふ意味が書いてある。

又一方「朝倉始末記」には、天正元年八月二十一日、信長の軍勢木下藤吉郎、稻葉伊豫守、柴田修理亮、安藤伊賀守、丹羽五郎左衛門以下、都合その勢五千餘騎、前波九郎兵衛吉繼を先陣として、南西口より攻來り、魚住備後守、平泉寺衆徒等三千餘騎は北口より押寄せ、景鏡が楯籠る犬山城を圍んでしまつた。此の時前波は「和談をしたら如何」といふと、尾張衆は、「信長公は義景が降参したら助けよとは御説があつたが、景鏡を救助せよ等との仰せはない。景鏡が私に主君を計つたことは無所存千萬だ、速に攻め亡してしまへ」と力味だが、藤吉郎の申すには、「既に義景は御敵である。之を討取つた景鏡は、朝倉氏に於てこそ逆臣なれ、織田家に取りては忠節の者である。斯る忠節の者を殺しては、以後誰も降参する者はあるまい」と救命論を吐いたので、風前の燈火に比された景鏡は、きわどい所で命を助つたといふ。

此の兩説は頗る極端の矛盾だ。「春日山日記」は信長が景鏡を斬罪に處したといひ、「朝倉始末記」は、一旦取圍んだ犬山城の圍みまで解いて、景鏡を救命したといふ。又一方は人面鬼心の不義者だから成敗するといひ、一方は織田氏に取りては忠臣だから救命せよといふ。何れが眞だか判明しない。然しよく検討してみると、後者の「始末記」の説が正しいのだ。何んとなれば、若し「日記」の言ふ如く、信長が刑戮したとすると、既に景鏡が義景の頸を信長に献上したる際に、呼び出されて殺害されて居らなければならぬ。又、若し果して然りとせば、翌天正二年四月十五

日、景鏡が平泉寺で一揆の爲に追はれ、土民に頸を搔取られたといふ史論が成立しないからである。兎に角、景鏡の如き悪黨は、徳育の上からも、筆誅を加へて置く必要があると思つたから、比較的その史實を詳述した、但、景鏡の墓は大野郡勝山町より北方十町計りの村岡山麓に在る。

第四節 敦賀城主

景 冬

朝倉景冬は孫四郎、修理亮、遠江守と稱す。朝倉家景の四男、越前國主初代敏景、大野犬山城主初代經景、及び與市郎の弟にて、金崎城主第一世。豪俠にして小天狗の綽號があつた。法名を芳永宗彌しうひつと曰ふ。

景 豊

朝倉景豊は孫四郎と稱す。父景冬の封を襲ひて金崎城主第二世。文龜三年四月三日、謀叛の露はるゝことを恐れて自害した。

第五節 金崎城主

教 景

朝倉教景は太郎左衛門尉金吾と稱す。朝倉敏景の七男、金崎城主初代。文明九年を以て生る。加賀の一向一揆討伐に戦功あり、弘治元年九月八日病卒す。齡七十有九、法名を東松院照葉宗滴と曰ふ。

景 紀

朝倉景紀は九郎左衛門と稱す。朝倉金吾教景の嫡男、金崎城主第二代。法名を伊冊と曰ふ。

景 恒

朝倉景恒は中務大輔と稱す。朝倉景紀の次男、金崎城主第三代を襲討したが、元龜元年卒去した。

道 景

朝倉道景は彦四郎權頭ごんかみと稱す。朝倉景恒の嫡男、金崎城主第四代の封を襲ふたが、天正元年八月十四日、近江國刀禰坂に於て死戦した。